



1951-1957

# 昭和29年、夏合宿の猛練習は、 我々の人生の羅針盤となっている。



卒業時記念写真。(中列、黒のユニフォームの人々が14期生)  
三橋(長尾)・飯田・瀬川・藤巻・伊藤・石田・井之口・長谷川

## 36年ぶりの再会

平成5年1月、三宮で六蹴会(14期)の新年会を催した。卒業以来36年ぶりの再会を果たしたメンバーもあり、お互いの変貌に驚く。

初めは、畏まっていた面々も、自己紹介がすみ、時間の経過とともに気分も解れて、互いに「くりくり坊主」の昔の面影を見つけだすと、話はずみ、会は一気に盛りあがった。

そうなのだ。目を閉じると見えてきたのだ、昭和28年から30年頃の我々の姿が……。

石田 昭雄君 昭和28年秋の神戸市中学校サッカー大会東神戸地区予選、我が六中サッカー部は苦戦の連続で、初戦の本山中学との試合は「0対1」で惜敗、第2戦の灘中戦とも「0対0」の引き分け、第3戦の魚崎中学との試合も前半まで「0対0」、なかなか得点をあげることができない。後半開始5分、ゴール前の混戦から彼の放ったシュートが、我がチームの初得点であり、ゴールネットに突きささったボールが一瞬停止したかのように見えたのがいまでも脳裏に焼き付いて離れない。彼の何事に対しても示される誠実さは、36年経っても変わらず、現在は第一勧銀から平野古陶軒に出向、要職

につき活躍中だ。

井之口 順君 彼はチーム1のスプリンターで100メートル位の距離を走らせると当時の中、高生のトップレベルであったと思う。その速さを支えたのは彼の立派な太い足で、増田伊太郎先生の体育・訓話にまで引用され、我がサッカー部のシンボルであった。右のウイング(懐かしい言葉だ。現在のサッカーでは死語かもしれない)が彼のポジションで、素晴らしいドリブルで敵のボックスを抜き去り、オープンからの攻撃をしかけるのが、彼の得意技であった。高2の全国大会県予選、対葺合高校戦で試合終了10分前、ボールを機械のように正確にセンターリン

グして味方のフォワードのゴールをアシストしたシーンは、つい昨日のように思い出させる。現在は父君のあとを継いで、井之口耳鼻咽喉科医院で天下の「国手」として活躍中だ。

長谷川 二郎君 彼は野球部でスラッガーで鳴らしていたのだが、高校1年のある時、感ずるところがあり、たぶん12期の山田先輩（現上智大教授）の素晴らしさに影響されてのことと思うが、我がサッカー部に転部してきた。持ち前の抜群の運動神経でもって、短時間でサッカーのテクニックをものにし、ハーフバックで活躍した。今も目蓋を閉じると、あの真夏の暑い第3運動場で、頭をタオルで鉢巻きをした彼が、ボールを追っ掛けている姿が浮かんでくる。現在は、日本自動調節器(株)で要職につき活躍中である。

飯田 隆彦君 左のウイングでボールをしぶとくキープし、ゴール目掛けてダッシュする姿とダブって、我々部員から、これまた上手に部費を徴収していく彼の真面目な姿が目には浮かんでくる。我々サッカー部のマネージャーで、乏しい部の財政をやりくりして、ボールの購入など我々の日常の練習を支えてくれた。昭和30年の国体予選、対県西宮高戦でユニフォームを新調してくれたのは、いまから考えても見事なマネジメントであり、この紙面をかりて我々一同感謝いたしたい。戦後の混乱期さめやらず、イエズス会の姉妹校から送られてきた（セコハンのアメリカンフットボール用）ユニフォームを着ていた我がサッカー部イレブンがニューのユニフォームで、県立西宮高校のグラウンドに立った、その姿を想像して戴きたい。実に誇らしい気分でした。彼はその真面目さで、半導体の研究に取り組み、ついには工学博士号を取得し、三菱電機(株)をへて、現在は岡山理科大学工学部教授として活躍中である。

世古 泰一君 彼は高校生になってからサッカーを始めた。六甲おろしの吹き荒ぶ寒中の第3運動場で白い息をはきながらランニングしている姿を思い出すが、むしろ、卒業してからのお付き合いの方が印象に深い。彼は目下、

立花証券・大阪支店長の要職にあって活躍中だが、その貴重な時間を割いて、我々の「HAPPY RETIREMENT」のため財形諸問題について、いろいろと相談に乗ってもらっている。貴重なメンバーの1人だ。

三橋 敬三君 彼は14期のなかで最古参のサッカー部員であると同時に、サッカー部のスターで、ゴール・キーパーとして華麗なボールさばきは我々の誇りであった。彼のキーパーとしてのキック力は超高校級であり、彼を擁する我がチームは、かなりのレベルにあったため、当時実力No.1の神戸高校から練習試合の申し込みがあった。あの厳しい武宮校長からも特別の許可があり、数回の練習試合をしたと記憶している。高2からセンター・フォワードに転じ、敵陣中央を、ドリブルで突破していく勇姿は、どれだけ味方を鼓舞したことか。36年前の彼を知る諸氏は、昔の「やんちゃな」面影は少しは残しているものの、洗練され、おちついた態度の彼に別人の思いを抱かれるに相違ない。武宮校長の教育の成果をみる思いと申せば、大げさかもしれないが、50代半ばになった我々が、友達の一人にそのような男をもつことも喜びでもあり、誇りでもある。現在は、バンドー化学(株)にて要職につき活躍中だ。

藤巻 順君 彼のポジションはレフト・ハーフバックで、常に手を抜くことなく、ひたすらストッパー役に徹し、ボールを追ひ掛けていた姿を思い出す。夏の合宿では炊事がかりを一手に引き受けて孤軍奮闘してくれたっけ。色白の美少年?であったが、36年ぶりに再会しても昔の面影は残っており、今も柔和な人柄には変わりがなかった。現在は、浅野スレート(株)福岡支店の要職にあって活躍中だ。

瀬川 三郎君 彼の話し抜きで、14期のサッカー部員を語ることは出来ない。敵がどのような方向から攻めて来ようとも、ゴール前で仁王立ちしてボールをクリアしてくれるのが彼だった。昭和28年及び30年の県下の高校サッカー大会では、ベスト8に入る前の段階で、ことごとく、当時強豪の県立

工業高校と対戦し、惜敗したけれど、県サッカー協会の役員が目にしたほどであった。彼がバックにいたというだけで、安心してプレーが出来たものである。

高2になって、フルバックからフォワードにコンバートされ、キープ力を生かして活躍したが、昭和30年の全国大会県予選の対葺合高戦で、左足からロングシュートを放った。今も我々のもつアルバムには、そのボールがネットに突きささった写真が張りつけてあり、アルバムのページを開くたびに、あの時の感激が込み上げてくる。神戸大学に進学のアとは、関西大学サッカー1次リーグで活躍し、大いに六蹴会の名をたかめてくれたのは、我々の記憶に新しいところである。現在は、(株)新井組の要職にあって、公私ともに多忙のよし。

伊藤 裕介君 自分のことを書くとなると、気が引けるものだ。六蹴会の行事には以前よく出席したが、最近忙しいことを理由に欠席を続けている。記念誌に今回、投稿する機会に、できるだけ顔をだそうと思っている。頭髪の薄くなっているのは14期では瀬川君と私が双壁である。現在は、ロイド船舶協会でIQAリード・アセッサーとして、頑張っている。

追記：我々が六甲学院でのサッカーを語るにおいて、どうしても欠くことのできない人がいる。12期の山田経三先輩だ。彼のリーダーシップのもとで行われた昭和28年の夏の合宿は、圧巻だった。あの1週間の猛練習に耐えたことが、以後の我々の人生を支えてきた何かになったと言ってよいだろう（あの合宿に参加した誰もが、同じ考えをもっているのではないだろうか）。この紙面をお借りして感謝の意を表したい。先輩は、現在上智大学教授として、また「解放の神学」についても著名でおられますが、更にご活躍されんことをお祈り申し上げます。

【伊藤 裕介】